

青年のほめられた経験が現在に及ぼす影響

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
西川 大輔

本研究は、青年が幼稚園・保育園時代から高校時代、高校卒業後までのどのようなほめられた経験を想起し、その経験が現在にどのように影響しているのかを探索的に検討することを目的とした。大学生、短期大学生、専門学校生 556名に対して質問紙調査を実施した。「ほめられ得点」と「コミュニケーション得点」をもとに非階層クラスター分析で抽出された「ほめ低コミュ低群」、「ほめ高コミュ高群」、「ほめ高コミュ低群」の3群と過去のほめられ5パターンにより分析を行った。その結果、過去にほめられる経験が多いと青年の現在のコミュニケーション量、活動性、学業成績に肯定的な影響を及ぼす反面、過去にほめられる経験が少ないと、コミュニケーション量、学業成績および友だち量に否定的な影響を及ぼすことが明らかとなった。青年が想起する「一番印象に残っている」ほめられた経験については、幼稚園・保育園時代では日常場面が半数を占め、小学校時代では学業や学校生活内などの学校に関わる場面が増えることが分かった。また、中学校時代と高校時代では部活動や学業場面が半数を占め、具体的な目標に向かって努力した過程や結果を他者からほめられたことが一番印象に残る傾向がみられた。高校卒業後は、日常生活、アルバイト場面の順に多く、幼少期と同様、ありふれた日常の中でのささいな変化に気づいてもらいたい、認められたいという青年心理が存在する可能性が示唆された。